

生活科

山岸 朋子
江藤 里佳

1 生活科における集団で学ぶよさ

生活科では本質を「豊かに感じる心を育むとともに自立への基礎を養うこと」ととらえ、本質に基づく基礎・基本を「自分なりの思いや願いをもちながら、「ひと、もの、こと」とかかわること」として、研究をすすめてきた。

昨年度は「ひと、もの、こと」と夢中になってかかわる活動や体験の中で、自分なりの思いをもって学ぶ場を設定してきた。それぞれの活動を通して「自分の思いを変容させる姿」や「自分なりにかかわりを広げたり深めたりしようとする姿」をめざす子どもの姿として追求してきた。その結果、一人一人が自分の思いをもち活動に取り組む姿や、自分なりに対象とかかわろうとする姿はみられるようになってきた。しかし、個の思いが他とのかかわりの中で変容する姿や、自分と違うかかわりを受け容れて、さらにかかわりを広げたり深めたりする姿がみられるまでには至らないことが多かった。

その原因を探ってみると、生活科の学習では地域の「ひと、もの、こと」とかかわり合いながら学習をすすめることが多いが、本校の子どもは、金沢市全域から通学しているため、地域との関連が比較的希薄である。また、共通の地域をもたないため、下校後異年齢の子ども同士で遊ぶことはほとんどない。集団で遊ぶ経験が少ないため、日常生活の中で諸感覚を通して「ひと、もの、こと」と直接かかわり合う経験も少なくなっているのが実状である。そこで、生活科の学習において集団で活動する経験を多く取り入れて、自分や友達のよさ、成長、変容に気づくことができるようにしていきたいと考えた。

もう一つの原因として、テレビやコンピュータ、本などの様々なメディアから得る知識は増え続けているが、それらの知識が生きて働く知恵になっているかという点、単なる知識で止まっている場合が多い。実体験や感動をともなわない知識は日常生活に生きて働かない。ある一つの事象に対して様々な考え方や感じ方があることを認めることができずに、自分の考えを押し通そうとしてトラブルになることも多々ある。また、小さい頃に経験しておかなければならないはずのことを経験していない子どもも多い。そのためか、経験や知識のないものに対して臆病になり、予測のできない事態や失敗をおそれて自分から進んで活動に参加できない子どもも

多い。そこで、生活科の学習では子どもが思わず参加したくなるような活動を設定し、多様な集団の中で「ひと、もの、こと」とどっぷりとかかわることのできる場を設けることで、様々な考えや方法があることに気づくことができるようにしたいと考えている。

今年度は、自分の思いが集団で学ぶ中で変容していく姿や、自分なりのかかわりを集団で学ぶ中で広げたり深めたりしていく姿をめざして研究をすすめていくことにした。

生活科の授業における集団で学ぶことのよさについては、以下のように捉えている。

- ・多様な人々の思いにふれ、様々な考えや方法があることに気づき、受け容れて生活に生かそうとすることができること
 - ・友達からの働きかけによって、自分や友達のよさ、成長、変容に気づくことができること
- 多様な人々の思いにふれ、様々な考えや方法があることに気づくとは、活動の中でただ楽しむだけで終わらせるのではなく、それぞれの子どもの学び取ったことを全体に広める場を設け違った考えや方法があることに気づかせ、自分に生かしていく姿がみられるような学習のことである。友達からの働きかけによって、自分や友達のよさ、成長、変容に気づくためにも、集団で学ぶことは必要である。例えば、草笛を上手に吹く子が友達から「○○くんうまいね。僕にも教えてほしいな。」と言われることで、自分の能力に気づき、みんなに分かりやすく教えてあげようという意欲が湧いてくると思われる。集団の中で、諸感覚を使ってたっぷり活動する楽しさや自分の願いの実現に向けて活動できた充実感などを味わう場を重ねることで、感じる心が豊かになり、学びに対する姿勢が確立していくと考える。

1、2年生のこの時期に、生活科の学習を通して、自分なりの思いを変容させる力、自分なりにかかわりを広めたり深めたりする力を育んでいきたい。その力は、生活科の学習だけにとどまらず、他教科や3年生以降の学習、さらには生涯学習においても必要な力だと考える。そのためにも、学習の過程で出会った事象を子どもが社会的・科学的に見つめ、生きて働く知恵にすることができるように、集団で学ぶことのよさを生かした学習をすすめていくことが重要である。

2 集団で学ぶよさが息づく

授業へのアプローチ

(1)「学びのシェア」とのかかわりから

生活科の学習において、活動に積極的にかかわることが学びへの第一歩であると考えられる。そこで、教師は子どもが今までにどのような経験を重ね、今何に興味・関心をもっているかなどを的確に捉え、単元を構想し、学習材を選択していく必要がある。子どもが「やってみたい」「おもしろそう」「ふしぎだな」と思うような学習材との出会わせ方の工夫や、学習環境の整備も大切である。特に、1、2年生の子どもは「ひと、もの、こと」とかかわることを通して学ぶことが多い。そこで、2年間を通して「ひと、もの、こと」とかかわることのできる活動を学習内容の中で積極的に扱っていく。

1年生では、自分とのかかわりを中心に、学級や学年の友達同士や上級生、家族とかかわることのできる活動を取り入れていく。子ども同士がかかわり合う場を多く設けることや、「ひと、もの、こと」とどっぶりとかかわる活動の中で楽しさを共有する場を設けることで、仲間としてのつながりが深まるであろう。まだまだ人とかかわり方を勉強していく必要がある1年生は、様々な相手とかかわる機会を多く取り入れることでその力を伸ばしていくことができると考える。

2年生では、他とのかかわりを通して、自分を見つめる活動を多く取り入れていく。小学校にも慣れ、いろいろな知恵がついてきた2年生は、1年生や幼稚園児と対象を変えながら繰り返しかかわる中で、試行錯誤しながら活動に取り組み、成長した自分に気づくであろう。また附属学校園のあるピースタウンを探検する活動では、町の人たちとかかわりの中からたくさんのかかわり方を学ぶであろう。

さらに活動の後には、子ども同士の思いを交流させる場を設けることで自分の思いを変容させたり、自分なりのかかわりを広めたり深めたりすることができることを考えた。

学習を行う際に、教師は学習後の子どもの姿に願いをもつことが大切である。活動を単なる活動で終わらせないために、生活科の学習においては、知的な気づきを促す場を大切にす。知的な気づきとは、子どもが自分なりの思いや願いをもちながら活動する中で気づいたことである。その知的な気づきを促す一つの方法として、子どもが「かべ」に出会うような場を設定したい。「かべ」とは子どもが活動する際、楽には越えられないが、努力すれば越えることができる程度の課題のことである。

例えば、コマを上手に回すことができる子に対して「○分間回し続けることができるか」と投げかけるような事である。子どもが試行錯誤してその「かべ」を乗り越えたときに、新たな気づき生まれる。コマを○分間回し続けたいという願いを持ちながら練習する中で、コマには重心があることに気づいたり、回す場所によってもコマの回る様子が違うことに気づくようなことである。

(2)規範について

生活科の授業では、自分が積極的に対象とかかわりながら学習していく場面と、思いを共有し集団でかかわりながら学習していく場面の二つの場面が考えられる。そこで、生活科の授業で大切にしたい規範として以下の点をあげた。

- ・夢中になって、ひたむきに活動する。
- ・自分の感じたことを、素直に表現する。
- ・自分や友達のよさを受け入れ生活に生かそうとする。

これらを一人一人が身につけ、集団として機能していくことで、活動の中で多様な人々の思いにふれ、様々な考えや方法があることに気づく姿や、自分のよさや成長を自覚することができる姿が見られるようになることを考える。また、これらの力が他教科の学習にもつながり、他教科で身につけた規範が生活科で生かされていくであろう。

(3)評価について

活動の途中や終わりには、活動で楽しかったことや、どんな思いや願いをもって活動したかどんなことに気づいたかなどを話し合い、次の活動に生かしていくことができるふりかえりの場を設定したい。ただ単に「楽しかった」だけでなく、「何が楽しかったのか」「どうして楽しくできたのか」などについて話し合い、自分や友達に知的な気づきがあったことに気づかせたい。

また、友達のよさに気づき、そのよさを自分に生かすことができるようにしたい。その時間にあつたことを集団でふり返ることで、これまでの自分の状態と比べて前との違いに気づいたり友達との違いに気づいて、そのよさを受け容れようとしたりすることができることを考える。

具体的な手立てとしては、その時間に気づいたことに気づくようなワークシートの工夫や、ふりかえりの場の工夫が考えられる。また、自分の変容に気づくために、ふりかえりカードを単元ごとに綴ったり、これまでの学習や気づきをふり返ることができるような教室掲示の工夫などをしていきたい。

3 実践例 — 1年 —

小学校入学という生活の大きな変化の中で、「いろんな勉強をしたい」「友達をたくさんつくりたい」と様々な期待を膨らませながらも、その一方では、新しい環境に出会い緊張している1年生。学校生活に対する緊張をほぐし、落ち着いて学校生活を送るためには、子ども同士がなかよしくなることが欠かせない。なかよしくなるためにはまず相手を知ることからと考え、はっきりとした声で自分の名前を伝えることから学習をはじめた。次に、隣の人の名前を言うことや自分の好きな動物や色など、子どもが選んだテーマについて話すことも加えていった。くり返し話す機会をもつことで、最後までしっかり話すことや、相手を見ながら話を聴くことが、少しずつではあるができるようになってきた。また、休み時間に新しい友達とかかわりをもつ子どもも増えてきた。そして、クラスの友達だけではなく、他のクラスや他学年の人ともなかよしくなりたい、学校のいろいろな場所や自然ともなかよしくなりたいというように、興味の範囲も次第に広がってきた。これらの思いは、1年2組の「たからもの」として教室掲示に残していき、新たな経験をするごとに喜びや楽しみを再確認することができるようにしながら学習を進めてきた。

(1) 単元名 みんななかよし♡1ねんせい

- (2) 目標
- ・1学期の学校生活をふり返ることを通して、身近な環境の様子や自分の変化に気づく。
 - ・1学期の学校生活の中で気づいたことや感じたことを、グループで協力しながら自分なりの方法で表現することができる。

(3) 生活科の学びと規範にかかわって

小学校入学当初は、毎日が新しい発見の連続であり、ドキドキワクワクしながら日々の学校生活を送ることができる。しかし、1学期も終盤になると、学校生活にも慣れ行動範囲は広がってくるが新鮮味がなくなってくる。このような時期に自分の生活をふり返り、改めて見つめ直すことは、日常生活の中で今まで気づかなかった事実を発見したり、違う見方に気づいたりする機会となる。また、自分の発見や思いを発表したり友達の気づきや思いを聴き合うことは、人にわかりやすく伝えるために、自分なりに表現方法を工夫する第一歩となり、人それぞれに違う発見があったり、人によって感じ方が違っていてもよいことに気づく機会ともなる。

本学級の子どもは、はじめての課題に出会った時に、「できるかな」「ちょっとむずかしそうだ」とつぶやきながらも「とりあえずやってみよう」と意欲的に取り組むことができる。学校ではじめてするということにも喜びを感じ、小さな経験の積み重ねや発見を大きく喜ぶ。しかし、友達と同じ表し方や話し方をすることで安心するようで、ある程度形式の決まった既習の活動には積極的に取り組めるが、人と違うものの見方や考え方をすることや、自分なりの表現をする活動にはなかなか取り組めない。また、自分と違う他の考え方や見方を認めることも、まだ難しいようである。

本単元では、今まで観察してきたアサガオをもう一度観察したり、学校を自分なりの目的をもって探検するなど、今までかかわってきたものを改めて見つめ直す場をもつことで、アサガオの成長に伴う変化に気づいたり、学校の施設や自然など今まで気づかなかったことがらに目が向くようにしていきたい。また、グループによる活動を取り入れ、友達と力を合わせながら活動する経験ももたせたい。グループの活動では、友達の思いをお互いに聴き入れながら活動を進めることが必要となる。その中で、それぞれの考え方のよさや違いに気づくことができるのではないかと考える。また、力を合わせて発表の準備をしていく中で、考えを出し合ったり譲り合ったりすることの必要性にも気づいていくのではないかと考えている。

(4) 集団のよさが息づく授業へのアプローチ

① 「学びのシェア」とのかかわりから

学校の様々な「ひと、もの、こと」となかよしくなれたか、という視点で1学期の生活をふり

返る場では、アサガオや自然などの変化や学校生活での気づき、学年、他学年、たてわりグループなど様々な人との交流などについて、自分なりの思いをしっかりと持たせた上で、それぞれの思いを出させたい。そうすることで、友達が自分とは違う見方や感じ方をしていたり、自分の知らなかったことを見つけていたことなどに気づくであろう。また、自分の学校生活を見直す意欲も膨らんでいくと考える。

課題を見つけ、新たに調査や観察をする活動では、興味や関心が強い項目ごとに集まって、グループをつくりたい。興味別にグループを編成することで、具体的な目的をもってグループ活動に取り組むことができるのではないかと考える。

本学級の子どもにとって、自分なりの思いを自分なりの方法で表現する発表会は、はじめての経験である。そこで、全体の場で様々な表現方法について話し合う機会をもったり、工夫している点を紹介し合う場をもつことで、友達の工夫や考えを自分の表現に生かせるようにしていきたい。

② 規範について

調べたり観察したりする活動では、実際に具体物とかかわりながら自分の五感を使って感じとり、自分なりの思いをもつことが大切である。自分の思いがあってこそ、人に伝えたいという気持ちが生まれ、表現する意義も出てくる。また、グループでの表現活動がはじめてである点を考慮して、グループで相談する時間を保障した上で、作業は分担して行うことにする。少人数のグループの活動では自分の思いを表出しやすいであろうし、話し合いをもったあと、個人で発表の準備を行うことで、「自分の思ったことを素直に表現する」こともできるであろう。

単元計画（総時数 10 時限+課外）

主な活動と内容	主に意識する規範	評価のポイント
1 1学期になかよしになったものを出し合う 〈なかよしになれたかな〉 ・「あくしゅだいさくせん」をして1年生のみんなとなかよしになれたよ ・掃除場の人となかよしになれたよ ・図書室で本となかよしになれたよ ・アサガオとなかよしになれたよ ・クローバーやタンポポとなかよしになれたよ	(1)	なかよしになれたかという視点で1学期の学校生活をふりかえり自分なりの思いを表現することができる
2 なかよし発表会の準備をする 〈探検や観察をしてもっとなかよしになろう〉 ・アサガオの花が咲いているよ ・学校にはいろんな虫がいるよ 〈なかよし発表会の準備をしよう〉 ・アサガオかみしばいをつくろう ・本物そっくりに描いた方がいいね ・学校クイズをつくろう ・クイズの答えを紙にかこう ・発表の練習をしよう ・発表会が楽しみだな	(1)(2)	自分なりの思いをもちながらグループで力を合わせて探検や観察・発表の準備ができる
3 なかよし発表会をする 〈なかよし発表会をしよう〉 ・大きな声で話そう ・友達の話を中心に聴こう ・初めて分かったことがあるよ ・自分でも見てみたいな	(1)(2)	友達と力を合わせて発表することができる 発表を聴くことで自分なりの思いをもつことができる

教室の規範 (1) 自分の思ったことを素直に表現する

(2) 人のよいところを見つけ、必要に応じて取り入れようとする

そして、準備の途中でグループごとに準備物を見合ったり、発表の練習をする時間をもつ。これによって、「人のよいところを見つけ、必要に応じて取り入れる」という規範意識の形成にもつながっていくと考える。

発表の場面では、自分自身が内容面、表現面で工夫したところも合わせて発表させたい。発表者自身が工夫した点について話すことで、聴き手は発表を聴く視点をもつことができ、よさを見つけるきっかけになるであろう。そして、発表後見つけたよさを全体の場で伝え合うことで、よさを共有することができると思う。

③ 評価について

学習のふりかえりの場面では、「自分が発見したこと・工夫したこと」「友達が発見していたこと・友達が工夫していたこと」の両面から活動をふり返らせたい。しかし、子どもは無意識に工夫をしていることもある。そこで、教師が具体的に工夫していることがらや姿などを取り上げまわりの子どもに気づかせて意識化させていくことも必要である。また、「ここが、～だからよいと思います。」「～を見つけたのがすごいね。」など、具体的な内容で話をさせることで、それぞれのよさを認め合うことができると考える。

(5) 本単元における授業の実際と考察

① 1学期になかよくなったものを出し合う

なかよしになれたかという視点で1学期の学校生活をふりかえり、自分なりの思いを表現することができる

7月に入り、1学期の学校生活の中でなかよしになった「ひと、もの、こと」（以後なかよしになったもの）について話し合った。5月、6月にも同じようにふり返る場をもってきたので、主に6月の活動の中で心に残ったことが出された。

全体の場で少し話をしたあとで、自分の思いを書かせる時間を設定した。同じものとなかよしになったとしても、感じたことや捉え方は人によって違う。その違いに気づかせ、自分なりに感じたことが自然に出るようにしたいと考えたからである。そして、記述をもとにして、なかよしになったものを出し合った。ちょうどアサガオの花が咲きはじめていた時期だったため、「アサガオとなかよしになった。」という意見が多かったが、「1年生の他のクラスの子や休み時間に遊んでくれる上級生となかよしになった。」「1年生みんなで作っている梅干しとなかよしになった。」「いろんな勉強をしたから1年2組の教室となかよしになった。」「音楽係で操作をしたからOHPの機械となかよしになった。」など、その子どもならではの思いも出てきた。(資料1)

なかよしになったもの

- | | |
|----------|----------|
| ・1年2組の友達 | ・蝶 |
| ・1年生 | ・トンボ |
| ・5年生 | ・かえる |
| ・6年生 | ・1年2組の教室 |
| ・梅干し | ・つきやま |
| ・アサガオ | ・みつごやま |
| ・ひまわり | ・OHP |

資料1 なかよしになったもの

友達の思いを聴きながら、「ああ思い出した、それもあったね。」「そういえば、わたしも～となかよしになったよ。」など、書いてはいないが同じ思いをもっているというつぶやきがたくさんあがった。また、「〇〇さんは、～となかよしになっていたんだ。わたしもなかよしになりたいな。」という思いも出された。そして、「いろんなものともっとなかよしになりたい」という方向へと進んでいくことになった。

② なかよし発表会の準備をする

自分なりの思いをもちながら グループで力を合わせて探検や観察・発表の準備ができる

もっとなかよしになりたい「ひと、もの、こと」として、アサガオの変身や学校にいる生き物、運動場、教室などがあがった。そして、それらともっとなかよしになるために、探検したり、詳しく調べたりすることになった。調べたい項目ごとにグループづくりをする際に、何人ぐらゐのグループで探検をするかが話題になった。はじめは、3人、4人、5人…など、思いつきで人数を言っている子どもがほとんどだった。そのうちに、「いくつか調べたいことが出てき

て、グループの中で2つに分かれるとしたら、3人だったら1人と2人になってしまうから、4人がいいと思う。」「人数が多すぎたら相談してもなかなか決まらないから、4人か5人ぐらいがやりやすいと思う。」などと、自分なりに考えながら進めていこうとする姿が見られた。そこで、4～5人程度でグループをつくることになり、8グループに分かれて学習を進めることになった。(資料2) また、探検活動の終わりに、発表会を聞くという目的をもつことで、ただ探検してなかよしになるだけではなく、友達の知らないことを見つけて知らせたいという意欲も高まった。

1年生にとって、探検活動ははじめてである。そこで、探検のマナーや約束について話し合う時間をもってから、活動をはじめた。1年生なりに、探検の方法や約束などを理由づけしながら考えていた。はじめての活動だからこそ、自分たちで計画を立て、自分たちで進めていくという経験が、今後の学習に生きてくると感じた。

子どもは、探検を楽しみ、発見の喜びを感じていた。(写真1) また、いろいろな経験の中で得た様々な考えを行動に結びつけている姿を見ることもできた。

いきものはかせグループのA児がトンボを一生懸命追いかけて捕まえ、かごに入れた。(写真2) そして虫に詳しいB児に「トンボって何を食べるの。」と尋ねた。B児は、「チョウを食べるよ。動いている虫を食べるの。でも、チョウは食べさせないで。」と答えた。B児は、家庭でチョウのさなぎを育て羽化させていたからだ。数日前に教室でそれを紹介され、羽化したチョウを見ていたA児は、納得した。そして、かごに入れたまま紙にとんぼの絵を描き、教室にもち帰った。しかし数時間後、かごの中でとんぼは死んでしまった。2回目の探検の時には、バッタを捕まえ絵を描くと、教室にはもち帰らず

もっとなかよしになりたいな

- ・きょうしつたんけん
- ・みつごやま
- ・あさがおかんさつ
- ・あさがお
- ・いきものはかせ
- ・いけ
- ・つきやまはっけん
- ・ひまわり

資料2 探検グループ



写真1 うまくつかまえられるかな



写真2 みてみて♡トンボをつかまえた

は、事前に子どもが会おうであろう「かべ」を予想し、各グループに対する教師のかかわり方をもっと詳しく考えておくことが必要であった。

発表会の準備も探検と平行して行った。国語の学習で発表会をした経験はあるが、自分の思いを発表する会は、今回がはじめてである。そこで、発表にはどんな方法があるかについても話合った。4月に2年生が聞いてくれた「なかよし集会」の内容を思い出しながら、紙に書いて見せる、クイズを出すなどの考えが出てきた。また、5月に5年生が学校の行事を紙芝居形式で教えてくれたことを思い出してもいた。その他、実物をもってきて見せる、写真にとって見せるなどの考えが出てきた。そして、グループで発表の方法を選択して作業を進めることになった。ほとんどのグループが画用紙を使うことを選び、クイズも取り入れていた。はじめは実物を見せると言っていたいきものはかせグループも、発表会に合わせてタイミングよく生き物を捕まえることの難しさから、絵も準備しておくことになった。具体的な作業に入る前に、メンバーの探検カードをもとに発表の流れをグループで話し合わせた。子どもは、それぞれの探検カードを見合いながら、友達があっと驚く発見を知らせようと意気込んでいた。ただ、1年生の発達段階を考

えると、探検カードに一度記録したものを改めて構成し、大きな紙に描き直すという作業は思った以上に難しいことだった。作業を進めていくうちに伝えたいことは膨らんでいっても、その分、見つけた時の感動は薄くなってしまった。

探検活動や発表会の準備では、活動の終わりにふりかえりの時間を取った。自分が頑張ったことや発見したことだけでなく、友達のよさや頑張っていたことについてもふり返ることにした。(資料3) 友達のよさにも焦点をあてて自分の活動をふり返る場をもつことで、友達のよいところを見つけて次の自分の活動に生かしていこうという気持ちが芽生えたようである。前時に見つけた友達のよさを次の活動に生かしていこうとする子どもや、友達から自分のよさを伝えられることで、自信を持って次の活動に取り組める子どももいた。自分のすることのみに一生懸命になりがちな1年生にとって、友達のよさに気づかせる場を与えることは、まわりに目を向け、視野を広めていくきっかけとなっていた。

- ・〇〇さんが、葉っぱを手で触っていた。私もやってみた。
- ・〇〇さんは、たんぼぼのくきの色をよく見て描いていました。見ると茶色の所がありました。
- ・池の中の虫を捕まえる入れ物をさがしてきて、貸してくれました。入れ物に入れると見やすくなりました。

資料3 探検のふり返りカードより

③ なかよし発表会をする

友達と力を合わせて発表することができる

発表を聴くことで自分なりの思いをもつことができる

国語の音読発表会では、声の大きさや気持ちをこめた話し方などが、ふりかえりのポイントとなっていた。みんななかよし発表会でも、発表会のはじめに、話す立場での約束と聴く立場での約束をしてから、発表会をはじめた。

T：話をする時、気をつけることは何ですか

C：はっきりした声です

T：使うところはどこですか

C：目です

C：心も使います

グループごとの発表では、まず、自分の頑張ったことを話してから、自分たちのテーマについて発表することにした。発表の前に友達の頑張ったことを聴くことで、発表を聴く視点ももてるのではないかと考えたからである。

C：わたしたちは、きょうしつたんけんグループです

C：ぼくは、絵を頑張って描きました

C：ぼくは、ことばを考えました

C：わたしは、絵をよく見て描きました

C：わたしは、絵をていねいに描きました

発表は、準備した画用紙をもって話をした。(写真3)

発表の場で緊張して何を話していいか分からなくなってしまわないようにと思い、話す内容をあらかじめ紙に書き、画用紙の裏に貼りつけておくことにした。しかしその結果、発表者は文を読むことに終始して単調な話し方になったため、見つけた喜びや子どもの思いは伝わりにくくなってしまった。

また、発表後の意見の交流の場では、発表の仕方(声の大きさや話し方)についての意見がそのほとんどを占め、発表内容に関する話があまり深まらなかった。これは、上に記した、発表会のための工夫が大きく関係していたと考える。原因の一つは、発表会のはじめに、話す立場と聴く立場での約束を確認したことである。方法についてのみ確認して発表会に移ったため、聴く子どもの意識が、話し方の善し悪しにかかわるものになってしまうことは当然である。発表の内容に目が向くような導入の仕方を工夫する必要があったと思う。原因の二つ目は、発表者に自分の頑張ったことを紹介させたことである。この紹介も発表の準備において自分が工夫したことが中

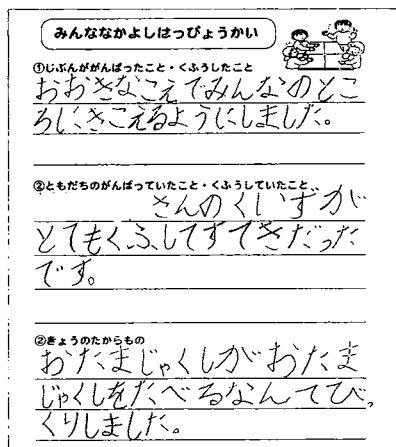


写真3 体育館で見つけたものは…

心となり、内容面と離れてしまった。このような原因が重なって、子どもの意識は、発表方法のよさ見つけになってしまい、内容面の深まりにつながっていかなかった。

発表会の2回目（後半）では、話を聴いて「はじめてわかったこと」「すごいなあと思ったこと」など、今日の「たからもの」を中心として交流を進められるように、話し合いの方向を変えた。そうすることで、発表の内容に目が向くようになり、内容面での意見が多く出されるようになった。（資料4）

今回、発表会という形式を取り入れて活動を行ったが、1年生の1学期という時期では、どっぴりと「ひと、もの、こと」とかかわる体験をもち、思わず出てくる言葉を友達に伝えていくことができるような環境設定をすべきであったかもしれない。発表会を取り入れ準備を重ねていくことで、感動が次第に薄らいでいってしまったり、本当に伝えたかった思いが削ぎ落とされてしまっている姿が見られた。発表会という形式の中にはまりこむことで、自分の思いを自分の言葉で伝えるという根本が揺らいでしまっては意味がない。発達段階を考慮して、まずは、自分の思いを自分で伝える活動を十分に行い、次に友達と協力して行うグループでの活動を取り入れていくというように、段階を踏んで経験させていくことが必要だった。ただ、発表の仕方などの形を学ぶ場も必要である。本単元で知った方法を、別の機会に少しずつ形を変えながら、自分の思いをしっかりと伝えることができるように生かしていきたい。



資料4 発表会のふりかえり
カードより

(6) 単元を終えて

「みんななかよし♡1年生」の単元を通して、入学してからの自分の生活をふり返し、新たに自分の身近にあるものを見つめ直そうという意識をもつことができた。また、今までは個人で行う活動がほとんどだったが、今回グループ活動を取り入れたことによって、自分たちで相談して進めることの難しさも知ったようであった。入学して3ヶ月、どこか一定の距離を置いたようなかわり方をしている子どももいたが、今回グループ活動を行い、「自分の思いが通らない」「みんなで探検しようと思うのになかなかそろって動けない」などの具体的な問題が起こる中で、徐々に自分の思いをぶつけながら、かわり合っている様子を見ることもできるようになってきた。

また、生き物に関する発表を聴いた後、休み時間に友達と連れだって虫探しにいく子どもが増えてきた。自分で家から虫かごをもってきたり、えさや育て方を調べる子どもも出てきた。「今までは虫が怖かったけれど、さわることができるようになったよ。」というように、生き物と親しむ子どもが増えたが、学校で捕まえた生き物は学校で放して帰るなど、生き物の命も大切にしようという思いは共有されている。

アサガオについては、朝のスピーチの話題にのぼることが多くなり、自分のアサガオと友達のアサガオの様子を比べながら話すことも増えてきた。また、アサガオの花を集めて花束をつくったり、花を押し花にするなど、アサガオを使って楽しんでいるのを見かけると、「やり方を教えて。」「一緒にやろう。」など、子ども同士が進んで声をかけ合い、積極的にかかわり合う姿も見ることができるようになってきた。

(7) 今後の課題

子ども一人一人が本来持っている思いは豊かである。しかし、それを十分に表現するだけの言葉（語彙）や方法を1年生はまだもち得ていない。そのため、自分の伝えたい思いを相手に伝えようとしても画一化された表現になってしまいがちである。今後も、「ひと、もの、こと」とどっぴりとかかわる活動を通して、その思いを表現する様々な手段を子どもたちの中で少しずつ広げていきたい。

また、一人一人が十分に思いを出すことができる場を保障した上で、学級の枠をこえた集団でかわり合いながら活動を進めていくことも経験させていきたい。様々な人とのかわり合いの中で多くの経験を積むことは、子どもの内面を耕し、広い視野で深く物事を考え、感じることに繋がっていくと考える。